

美術の窓 (113)

財団法人大和文華館の古記録「業務概況」

大和文華館館長 浅野秀剛

大和文華館は本年10月に開館50周年を迎える。それに向けて、昨年10月から閉館し、リニューアルオープンに向けて、展示室・ミュージアムショップ・トイレなどを全面的に改修し、駐車場とそこから本館に至る通路を整備する工事を進めている。それと並行して記念出版物の刊行を予定している。そのひとつが大和文華館50年史の編纂である。その50年史のなかの「大和文華館のあゆみ」の原稿執筆を割り当てられた私は、種々の資料をあさることとなったが、保存されていた古い記録のなかに「業務概況」という一冊の冊子があった。題名のごとく毎月の業務の概況を記したもので、昭和21年10月から昭和28年8月までの記録である。少なくともその期間は毎月きちんと作成されたものと推察されるが、現在は一部失われている。特に後半はかなり欠落しているが、それでも、財団法人大和文華館の開館以前の状況を生で伝えてくれる貴重な記録である。記録者は、最初の職員である谷田閔次氏(文中、「谷田主事」と記されている)で、たとえば「昭和二十一年十月 業務概況」として「人事」(主として、当時財団専務理事であった矢代幸雄先生と谷田氏の動向)、「購入」(主として、「標本」美術品を指す)と「図書」品、そして重要事項を簡潔に記した内容である。月末あるいは翌月初めに書き、第一頁右下に自身の「谷田」印を捺し、上部欄外に矢代先生が確認した証である「矢代」印を捺し、綴じて保存したものであることは疑いない。

財団法人大和文華館は昭和21年5月6日に設立された。しかし、美術館が学園前に建設さ

れて開館するのは、昭和35年10月31日であるから、14年余は館のない時代であった。その間の主たる業務は、美術品の収集と美術雑誌「大和文華」の発行であった。「業務概況」は館のない時代の前半7年間の飾らない記録なのである。その中のいくつかを紹介するので、往時に思いを馳せ、黎明期の財団の状況を想像していただきたい。

昭和23年10月の記事に「編集出版事業の主任として木下龍也を採用」とある。「大和文華」の第1号は昭和26年3月1日付の発行であるが、少なくともその2年半前には発行に向けて人の手当をしていたことになる。財団の事業の5番目に「調査研究ノ成果発表等ノ為ニスル出版」とあるので、雑誌発刊の構想は財団発足時よりあったことは明らかであるが、それに向けて着実に準備を進めていたことが了解される。昭和26年3月の記事に「『大和文華』第一号五百部の印刷製本を終り、三十日印刷所より受取り直ちに配本に着手した。」、同年7月の記事に「大和文華第二号(五百部)出来し、上旬にて配本を終った。」とある。第2号は6月1日付の発行であるので、1号、2号とも発行日より一か月遅れの配本であったことが分かる。

昭和24年4月の記事に「事務所開設の問題につき玉置専務と懇談し、その結果、根本方針は最初の計画(奈良線沿線の小丘陵地帯を選び本拠を設ける)通りとすることとなった。」とある。その頃財団は、事務所を上本町百貨店内に設けるべく交渉していた。その交渉は断念することになるのであるが、そ

の過程での記録である。「奈良線沿線の小丘陵地帯」への美術館の建設計画は、財団設立当初からあったことがこれで確認できる。

昭和24年9月の記事に「京都博物館の依頼により、二十二日より同館の辻ヶ花裂展に、本館所蔵の五葉を出品した。」とあり、また翌十月の記事に「大阪美術館茶道美術展に本館蔵、織部消息一幅を出陳、又立花図一卷を研究のため京都博物館山根有三氏に貸与した。尚京都博物館に出陳した辻ヶ花裂五葉は二十日返却を受けた。」とある。財団が購入した美術品は、理事会・研究会等で展覧されることはあったが、一般に公開することはなかった。一般に公開するための貸し出しの最初がこれらの記事である。研究のために作品を借り受けた山根氏はその後、東京大学教授となり、矢代先生同様文化功労者となった。所蔵品の最初の大規模な公開は、昭和27年11月、奈良博物館(現奈良国立博物館)においてである。その兆しは昭和25年12月の「奈良博物館に於て本館蔵品の特別陳列を行ふ件に就いて、黒田館長より明年四月に予定し度い旨の申入があった。」という記事である。結局、計画は1年以上延びることになるのであるが、その間の関係記事を拾うと、「奈良博物館における本館の特別展のため、計画案の作成に着手した。」(昭和26年2月)、「第一回展覧の準備を開始、二十二日事務所で奈良博物館黒田館長外、本社村上部長と会合し、陳列予定品を展示して大体の計画を決定した。(後略)」(昭和27年9月)と続き、展覧の具体的な内容が記録されているので、財団としても重大な事業であったことは確かである。公開は11月3日から同月30日まで、所蔵品60点が展覧され、初日は無料公開、2日目以降は計11,846人の

観覧者があったと記録されている(目録の題名は『第壹回展覧目録』となっている)。「業務概況」には、その時の記念講演会や列品講座についても記載されている。

昭和25年9月の記事に「二十一日関産寮に於いて役員会を開催、矢代専務理事の辞任並に顧問就任を決定した。」とある。これは、その年の8月に矢代先生が国の文化財保護委員会委員に就任したための措置である。文化財保護委員になれば、財団専務理事を続けられないものかどうかは寡聞にして知らないが、先生は、その時以降昭和35年2月1日までは形式上財団の顧問であり、それ以後は専務理事に復帰している。ただし、先生と財団の関係は、顧問の間もそれ以前と何ら変わることはなかったようである。

財団の事務所は、当初、河内の道明寺内にあったが、昭和27年に大阪市東区船越町1-48に移転し、昭和35年に現在地に大和文華館ができるまではそこが事務所であった。「業務概況」にはその移転の様子も記録されている。昭和27年4月の記事に「七日、十四日、二十四日の三回標本(美術品のことである)の一部を舟越町倉庫に運搬した。」とあり、7月には残りの標本全部と図書を運搬、9月に「本月より船越町に事務所を移転した。」と記されている。奈良博物館における財団所蔵の美術品公開の最終事務は船越町で行われたのである。

「業務概況」を認めた谷田氏は、昭和21年7月1日に財団職員となり、同29年5月29日に退職する。その後は服飾史の著書を多く残され、お茶の水女子大学学長を務められた。残念ながら、同様の「業務概況」は他に伝存していない。氏は、ご自身の書いたものが60年後に貴重な一次史料として活用されることを、果たして予想していたであらうか。

季刊 美のたより No.171

平成22年8月1日

発行 大和文華館